

特 集

仮設住宅におけるボランティア活動を通じた看護学生の学び

中島佳緒里¹ 大渡 佳世¹ 奥村 潤子¹

要旨

東日本大震災が発災してから半年後、日本赤十字豊田看護大学の学生の発案により、24名の学生とともに被災地でボランティア活動を展開した。活動に参加した学生の体験から、応急仮設住宅におけるボランティア活動を通してどのような学びがあったかを明らかにすることを目的に、自己報告書の分析を行った。報告書からは、「コミュニケーション」「被災地・住民（被災者）の状況」「自立支援活動」「学生の思い」「看護学生として考えたこと」の5つのカテゴリーに分類された。それぞれの項目は、被災地・被災者を中心とした生活の自立支援活動、住民（被災者）とのコミュニケーションの意味づけ、デブリーフィングを含めたメンバー間の相互作用に関連付けられた。中期的な復興を支援するに当たり、応急仮設住宅におけるボランティア活動には、良き聴き手としての役割や観察力を含む問題解決思考を必要とするため、援助技術や対人スキルを学んでいる看護学生が有用な人材になると考えられた。

キーワード ボランティア活動 看護学生 コミュニケーション 応急仮設住宅

I. はじめに

2011年3月11日、未曾有の大津波が東日本を襲い、想像を絶する範囲の被害と、生活区域が全滅し行政の復活もままならない状況のまま、半年が経過した。被災地では日本全国から駆け付けた医療救護班も引き上げ、被災者は応急仮設住宅への移行も進み、復興に向かう人々の状況が報道され、見かけ上は平穏を取り戻しつつある。しかし、阪神淡路大震災や新潟県中越地震と比べ、復興が遅々として進まず先の見えない状況に、被災者の日常生活を取り戻すためには多くの問題が長期化する気配が強くなる。このような広範囲の重複した「複合的な危機的状況」において赤十字の看護大学として何ができるのか、予測される東南海沖地震を見据えて、実践的に計画する必要性に迫られた。

今回、日本赤十字豊田看護大学（以下本学）の学生の発案で、東日本大震災の被災地（岩手県・宮城県）のボ

ランティア活動に参加する機会を得た。学生たちの体験から、応急仮設住宅でのボランティア活動を通してどのような学びがあったのかを知り、その活動内容の意味づけを行い外部支援者として何ができるかを検討することを目的とした。

II. ボランティア活動の実際

2011年8月31日から9月6日の7日間（車中2泊）、24名の学生が岩手県釜石・住田地区と宮城県七ヶ浜地区の2班に分かれて、ボランティア活動を展開した。

1. 岩手県釜石・住田地区

16名の学生（4年生5名、編入生1名、1年生10名）が、岩手県立大学の学生が中心となって運営している「いわてGINGA-NETプロジェクト」に参加した。活動は、応急仮設住宅におけるコミュニティ形成の支援であり、同じ大学の学生が重ならないように編成されたグループで、4日間同じメンバーで同じ場所で行われた。集

¹ 日本赤十字豊田看護大学

会所では、他大学の学生と協力してサロンの運営、巻法や肩たたき、マッサージなどのリラクゼーションを実践した。

2. 宮城県七ヶ浜地区

8名の学生（4年生5名、2年生3名）が活動に参加した。特定非営利法人レスキューストックヤードが運営するボランティアセンターを拠点に、4か所の応急仮設住宅集会所で、血圧測定やハンド・リフレクソロジーを行った（図1）。血圧測定は、「血圧を測ってもらって安心して」「測定する機会があまりないのでありがたい」と、高齢者の多い応急仮設住宅の住民には好評であった。



図1 血圧測定の様子

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

対象は、今回のボランティア活動に参加した24名である。このうち赤十字災害看護、及び赤十字災害救護演習を終了しているものは10名であった。ボランティアに参加する前に、事前ミーティングとして、ボランティアの心構えや外傷後ストレス障害についての知識を教授し、学生たちがスムーズに現地でデブリーフィングが行えるように、1・2年生と4年生を組み合わせたグループ作りを行った。

2. 手続き

ボランティア活動終了後、「ボランティア活動に参加して感じたこと、考えたこと」や「ボランティア活動を通して見つけた自分自身の課題」を2000字程度で自己

報告するよう依頼した。

3. 分析方法

提出された報告書から、学生の学びに関する記述内容を選出し、キーワードを抽出した。その内容に沿って文脈を確認しながらカテゴリーに分類した。分類は、看護学の研究者2名によって、すべての項目が一致するまで繰り返した。その後、キーワードやカテゴリーの意味を解釈し、構造図を作成した。その構造図より活動内容の意味づけを行い、被災地の中期的な生活自立支援において看護学生に何ができるかの考察を加えた。

4. 倫理的配慮

対象者全員に報告書が研究に使用される旨が説明され、同意を得た。報告書に記載された個人情報はいずれも削除され個人が特定できないこと、研究協力しない場合あるいは途中での協力中止等の如何なる状況においても成績や学業への影響がないことを確約した。また、分析に使用したデータは研究が終了した時点で、速やかにシュレッダーで裁断することを説明した。

Ⅳ. 結果

自己報告から学生の体験が記述されている内容について、文脈を壊さないように選出した。選出された記述は156文であった。それぞれ同じ内容を示す記述を分類し、キーワードを抽出した。抽出されたキーワードは、「コミュニケーション」に関する4項目、「被災地・被災者（住民）の状況」に関する4項目、「自立支援活動」に関する4項目、「学生の思い」に関する4項目、「看護学生として考えたこと」に関する4項目であった（表1）。それぞれのカテゴリーに沿って説明する。

1. コミュニケーションに分類された記述

「沈黙時間がとても辛く感じた」「傾くことしかできなかった」「返答に困ることが多かった」など、住民とのコミュニケーションの難しさを多くの学生が感じていた。被災地の惨状や住民からの震災の状況、住居や家族を失ってしまった悲しみなど、自分が体験したことのない想像を絶する内容に、学生は圧倒され、とまどい、ただ話を聞くだけになっていた。この体験は、「懸命に聞くこと」「自分の体験を話すことで気持ちの整理をして

いたのではないか」「聴くということは、その人に寄り添う、受け止めていくことと考えた」など、話を聴く意味を深く考えることにつながっていた。さらに、応急仮設住宅の集会所での活動を通して、住民の方々から「お話をできてよかったよ」「本当に来てくれてありがとう」「つらいこともあったけど、皆に会えてよかった」など、住民からの感謝の言葉をいただいた学生は、話を聴くことの意味を肯定的に捉えていた。

また、サロンや集会所での活動は5から7名のグループで行ったため、活動計画や反省会、デブリーフィング (debriefing 災害に遭うなどつらい体験をした後で、その経験について詳しく話し、つらさを克服する手法) によってメンバー間の相互作用を生じる場面が多くあり、「得意分野を生かせるように、知識や情報の共有をした」「相手を尊重していることが伝わってくる」「違う角度からの考え方を知ることができた」「自分もまわりに助けられただけでなく、役に立ったところもあったと気づくことができた」など、肯定的な相互関係が示されていた。しかし、中には『「流される」などの言葉を子供たちの前ですることに意見したが、「聞こえていないから」と聞き流されてしまった。グループの和を乱し、短期の活動を気持ちよく行えなくなると思い、それ以上何もしなかった。でも自分は許せなかった』との記述も

あり、各大学からの集合体のためグループダイナミクスがうまく働かず、メンバーに否定的な感情を抱く記述があった。

2. 被災地・住民（被災者）の状況に分類された記述

被災地を目の当たりにして、「ほとんど復興が終わっていない状況」「まだまだ復興の途中である」と復興の状況を捉えていた。一方、住民の話を聞くことにより『前はずっとひどかった』と説明してくれた』や「被災直後（写真）と現在とは全く違っており、片付いてきていることに気付かされた』『自分たちは点でしか見えないが、そこには住んでいた人々の人生があり「線」なのだ』と被災地の人々が生きてきた軌跡を感じていた。また、住民の言動から、『嘆いていても仕方がないし、これから頑張るしかないね』ととても前向きで、自分が力をもらった』『東北の人が前向きに頑張っているという気持ち』『人間の強さを感じた』『人と人との繋がりの大切さを感じた』など、住民の力強さをボランティアに参加した学生たちが受け取っていた。しかし、自分が目にした被災地の現状と、住民が震災の体験を淡々と話す様子から、「心の傷や記憶は消えることがない」「一生消えることのない大きな傷」「震災の記憶やその時の思いを抱えながら暮らしている」など、住民のつらさを想像

表 1 抽出されたカテゴリー

キーワード	カテゴリー
コミュニケーションの難しさ (7) 話を聞く意味 (11) 住民からの感謝の言葉 (7) メンバー間の相互作用 (12)	コミュニケーション
復興の状況 (7) 住民（被災者）の状況 (11) 住民（被災者）のつらさを想像する (9) 住民（被災者）の強さ (11)	被災地・住民の状況
情報収集 (4) 実際の活動 (9) 自立に向けて (9) 住民（被災者）のニーズをとらえる努力 (6)	自立支援活動
自分本位の考え (4) ボランティアへの不安 (6) 何もできない思い (8) 自分にできること (4)	学生の思い
伝えていく役割 (7) ボランティアとしての心構え・知識 (8) ボランティアの責任 (8) 情報の取り扱い (7)	看護学生として考えたこと

() 内は記述された数を示す

し、思いやる気持ちが窺えた。沿岸地の凄惨な被害を見て、「自分にはすべてはわからない」「実際に経験しないとその人の気持ちはわからない」との記述もみられ、学生の経験知からは理解できないほどの衝撃であったことがわかった。

仮設住宅や遊んでいる子供を見て、「雨で昼間から暗いにも関わらず、ほとんどの家が電気を消して過ごしていた」「子供は元気に遊んでいたが、震災の話を大人がしていると表情が暗くなった」など、住民の状況を客観的に捉えていた。中には、「一軒一軒回ったが、若い方は迷惑そうな方が多くいた」「ボランティアのチラシがポストに溢れている家も少なくない」といったボランティアが住民に及ぼす影響についての記述もあった。

3. 自立支援活動として分類された記述

自立支援活動として分類された項目は、‘情報収集’、‘実際の活動’、‘自立に向けて’、‘住民のニーズをとらえる努力’の4項目であった。情報収集は、「この地区の特徴を知るために一軒一軒挨拶して回った」や「情報を自分で収集する」といった活動を計画するための行動であった。また、実際の活動は、「高齢者が多かったので肩たたきやマッサージを取り入れた」「子供たちが思いっきり遊べる環境づくり」など、活動の内容を記述していた。キーワードとなった‘情報収集’をもとに、「住民の方に受け入れていただくために、ゴミ拾いをしながら仮設住宅の周りを歩いた」「大人のかかわりが少ないことが課題となったため、梅干しをもって仮設住宅を訪問し、話を伺った」など、その地区のコミュニティ形成の程度や、住民がボランティアをどのように受け入れているかをとらえ、実際の活動を計画している記述も多くみられた。さらに、「住民同士のコミュニケーションを図る場になった」「住民から自治会をつくらうという発案につながった」、自然発生的に「地区の盆踊りの唄を歌って、皆の一体感が生まれた」など、自分達の活動が自立に向けて意図的にコミュニティをつくる場の提供になったと評価していた。この一連の活動を通して、学生は、「被災者のニーズを把握し、その中で自分たちにできることを見つけて行くことが大切である」「個々のニーズを把握する」「被災者の方々に本当に必要な支援は何なのか考える」等、提供する側の一方的な自己満足ではなく、住民のニーズをとらえる努力をしていたことが窺えた。

4. 学生の思いに分類された項目

多くの学生の報告からは、活動の動機として「少しでも被災者の力になりたい」「ボランティアをしたいという思いだけ」「買い物に行けない人がいるので、買い物に連れて行ってあげたらいい」など、自己を中心とした自分本位の考えが示されていた。また、「本当に被災者の方が望んでいることをやっているのだろうか、迷惑になっているのではないかと感じた」「できることがあるのか不安であった」と、活動前にはボランティアについて漠然としたイメージしかなく、不安を生じていたことがわかった。この傾向は低学年に多く、看護師を目指す者として何かしたいが、知識や技術が伴わないために生じた不安であると考えられる。一方、活動中に多くの学生が直面していたのは、「自分は何もできないことを改めて感じた」「自分の無力さを痛感した」「何もできないことに申し訳なさや情けなさを感じてしまった」「わかったつもりになっているだけ」など、何もできない思いであった。この思いは、住民から聞く津波の経験に対して、何か答えなければならないといった支援者としての気負いが見られる時期に多く、前述した‘話を聴く意味’を理解することによって軽減すると考えられた。つまり、自分の行動の意味を考えることで、「少しだが自分でできることがわかった」「微力かもしれないが無力ではない」「一人一人の行動の積み重ねが、現地の方の力や元気になっていることがわかった」など、微細であるが自分にできることに気が付いたと推察される。

5. 看護学生として考えたことに分類された記述

ここに分類された項目は、ボランティアの体験を通して見つけた課題や問題であった。本学に戻った時の自分たちの役割のひとつとして、「体験を情報として広げていく」「被災地や被災者の現状を伝える」「体験や学びを人に伝えて、風化させないこと」など、伝えていく役割を挙げていた。また、臨床実習が終了した4年生が多く参加したこともあり、現在のボランティアが抱える問題を看護学生の視点で述べていた。「自分の（疾患への）知識のなさを痛感した」「必要な勉強をし、心構えを持つ」「ボランティアとして必要な学習を実感した」等、ボランティアとしての心構え・知識を持たないと、住民のつらい話に巻き込まれ、かえって迷惑をかける事態になりかねないと述べていた。「行動に責任を持って活動する」「自分には何ができて何ができないのか見極める」

「ボランティアとして自覚を持ち責任ある行動の大切さ」は、住民の健康危機に直面して、看護学生である自分たちが何とかするべきとの発言から、ボランティアの責任の範囲をグループメンバーで話し合い結論付けた内容であった。

「自分の情報が知らない間にいろいろな人に知れ渡っているのは不快であると思った」「引き継ぎノートでは何が行われているのか知ることができなかった」等、情報に関する記述は5項目であった。これは、活動記録に記載する内容がボランティア個人に任されているために生じている問題であった。その記録には、住民との会話、気になったこと、自分の受け止め方等、個人情報を含めた様々な内容が記載されていた。本学の学生達は、演習記録や実習記録における個人情報の取扱いを厳しく教えられているため、情報の取扱いへの配慮の無さを批判したと考えられる。しかし、「振り返りシートは社会福祉協議会に提出し、住民で気になる人は保健師等が対応できるようにしている」と記述した学生もおり、地区によって情報の取扱いが大きく異なっていた。いずれにしても、ボランティアにおける住民(被災者)の情報の取扱いは、個人情報の如何に関わらず、これから対処していかなければならない問題である。

V. 考察

学生の自己報告から抽出した20のキーワードを図示し、項目間の関連を推測した(図2)。被災地に入ることによって学生は、'復興の状況'や'住民(被災者)の状況'を直接見て感じることができる。被災地の映像は、ニュースや新聞などのメディアを通して随時目にする。被災の広さ・状況を見る、瓦礫の山の汚臭など、五感によって状況を受け止め、その場における自己が主観的になるため、'住民のつらさを想像する'ことにつながった。そのつらさは、津波の体験を語る住民とのコミュニケーションを通して'何もできない思い'を引き起こすが、デブリーフィングや信頼関係のある'メンバー間の相互作用'によって、'話を聴く意味'を考え、自分自身の存在価値を維持・向上させていた。しかし、学生が強い正義感や有能感を持っていると'自分本位の考え'に傾くことも多く、何かを答えなければいけないと自分主体に考えるため、住民のつらい思いに寄り添うことができずに'コミュニケーションの難しさ'を強く感じると推察された。また、復興に向けて生きる'住民(被災者)の力強さ'や人とのつながりは、'何もできない思い'を持っていた学生に感動と充足感を与え、活動に対する'住民からの感謝の言葉'を受けると、自分の行動の意味を内省し、微細でも'自分にできること'があると気付いていた。現実を認識するためには論理科学モードとナ

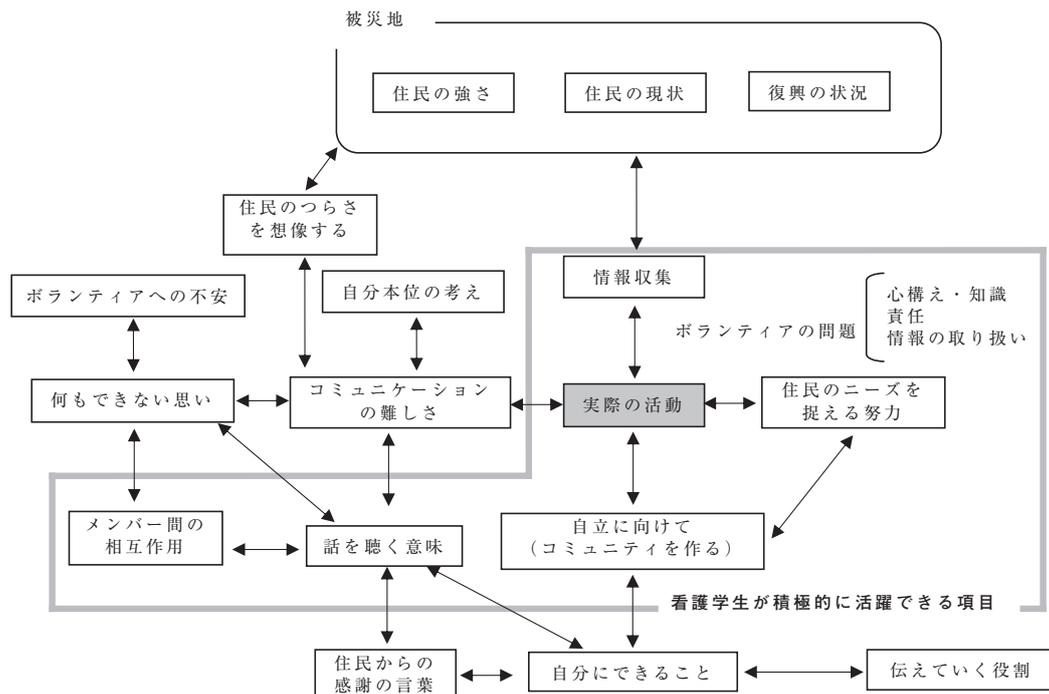


図2 キーワードから推測された項目間の関連

ラティブ・モードの2つがあり、日常世界では主に後者が採用される（浅野 2001）。ナラティブ・モードにおける現実認識は、自己が自己について語る自己物語を他者に承認されることで形作られる（宮本・渥美 2009、能智 2006）。つまり、ここで体験したコミュニケーションは、地震や津波を経験していない学生達が、住民の話に傾き、その力強さに感嘆の声をもって反応することによって、被災地の人々の自己物語を紡ぐ役割を果たしたと考えられた。

ボランティアに参加した学生は、活動前に環境や住民の生活を‘情報収集’し、活動内容を決定していた。活動内容はマッサージや肩たたき、会話をするなど様々だが、中心となったのは‘自立に向けた’住民のコミュニティを作る活動であった。この時期における集会所やサロンは、ボランティアなどの外部支援者によって住民のコミュニティを促進させる場となっており、本学の学生達も応急仮設住宅の人々の関係性や個性をアセスメントし、問題の把握と解決する方法を実践していた。このような‘実際の活動’を通して、学生は被災地の人々に必要な支援は何かといった‘住民のニーズをとらえる努力’をしていた。急性期は、生命の安全や水の確保といった目に見える問題が生じるため基本的なニーズを把握しやすいが、応急仮設住宅への移行が一段落するとそのニーズは捉えどころなくなると指摘されている（渥美 2001）。病院や地域での臨地実習を経験し、学習してきた看護学生であるからこそ、応急仮設住宅での問題を個人の生活に焦点をあててアセスメントできたと考えられる。さらに、自治会をつくるなど長期的な目標を住民が語ることによって、自分達のコミュニティ支援の有用性が実感できたと推察された。このように応急仮設住宅における活動には、良き聴き手としての役割や看護過程と同じ問題解決思考を必要とするため、対人スキルや看護過程を訓練されている看護学生が活躍できる場となるのではないかと考えられた。

一方、‘実際の活動’や‘メンバー間の相互作用’から、‘ボランティアの心構え・知識’の不足、‘ボランティアの責任’‘情報の取扱い’等、現状のボランティアが抱える問題を捉えており、専門的な知識をもった看護学生ならではの意見であった。すなわち、支援の対象となる応急仮設住宅の住民は津波によりつらい経験や生活を強いられており、ボランティアといえども、住民の生活に土足で踏み込むような行動は慎み、個人情報取扱いなど

の個人の尊厳を保つための知識や、ボランティアとしての責任の範囲を明確にする必要が示唆された。

VI. おわりに

東日本大震災におけるボランティアに参加した学生の活動や学びから、コミュニケーション4項目、被災地・住民（被災者）の状況4項目、自立支援活動4項目、学生の思い4項目、看護学生として考えたこと4項目、合計5つのカテゴリー20項目のキーワードが抽出された。それぞれの項目は、被災地・被災者を中心とした自立支援活動、住民（被災者）とのコミュニケーションによって生じる活動の意味づけ、デブリーフィングを含めたメンバー間の相互作用に関連付けられた。仮設住宅におけるボランティア活動には、良き聴き手としての役割、看護過程と同じ問題解決思考を必要とするため、専門的な知識・援助技術・対人スキルを学んでいる看護学生が有用な人材になるのではないかと考えられた。

最後に、学生の未熟な手技や会話に笑顔でお答え下さった被災地の皆様、苦しい体験や気持ちを語っていただいた応急仮設住宅の皆様、ボランティア活動の調整をしてくださりました特定非営利法人レスキューストックヤード並びにいわてGINGA-NETの皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- 浅野智彦 (2001). 自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ, 東京: 勁草書房.
- 渥美公秀 (2001). 研究・実践活動の概要と考察の糸口, ボランティア人間科学紀要, 2, 35-42.
- 馬場由美子, 島かおり, 大宅顕一郎 (2006). 学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察, 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 36, 155-162.
- 宮本匠, 渥美公秀 (2009). 災害復興における物語りと外部支援者の役割について 新潟県中越地震の事例から, 実験社会心理学研究, 49(1), 17-31
- 西阪仰, 須永将史, 黒嶋智美, 早野薫, 岩田夏穂 (2012). 避難者の語りの開始, 明治大学院大学社会学部附属研究所年報, 42, 3-23
- 能智正博 (2006). <語り>と出会う, 東京: ミネルヴァ書房.